

① 学習指導案

プログラム	No. 11 「 地域プランナーになろう 」
単元名 (全 時間)	価値の創造 ～森林再生プロジェクト～
学習のねらい	森林問題についての学習から地域の竹林整備の課題について目を向けることで、日本が抱える課題と地域、自分との関わりに気付くと共に、自分にできることを考えることができるようにする。
学習内容	1 森林問題について知る。 2 森林問題が、地域の課題であることを知る。 3 廃棄される竹の新たな価値を考える。 4 再生した竹製品を寄贈する。
参考資料 準備品 実施場所等	実施場所「仏向小学校」「仏向町」 協力「神奈川大井の里観光協会」

学習の流れ

時間	学習活動	教師の指導	評価
1 2	○総合のテーマを決める。	・子どもたちと過去の実践や総合という教科の価値を共有することで、今年度のテーマを出すことができるようにする。	★今年度の総合のテーマを考え、意欲を高めることができる。
3 4	○地域の森林問題について調べる。	・整備されていない森林が増えているという問題が、身近な地域でも起きていることを理解できるようにする。	★日本と地域、自分との関りを知り、問題意識を高めることができる。
5 6	○「竹」の特徴について教わる。	・大井町観光協会の方と出会うことで、「竹」を生かして町おこしに取り組んでいることや、竹の特徴、竹を加工するときのポイントについて理解する。	★「竹」の特徴について理解している。
7 ～ 10	○「竹」の再利用方法について考える。	・廃棄される「竹」を作り変えることで、新しい価値を見出し、利用可能な製品を目指して活動できるようにする。	★「竹」の特徴を生かしながら、新たな価値を見出そうとしている。



1 1 ～ 2 0	○「竹」を加工する。	・自分の計画に基づき、「竹」を加工することで、新たな価値を考えながら活動できるようにする。	★「竹」の特徴を生かしながら「竹製品」をつくらうとしている。
2 1 ～ 2 5	○「竹の作品展」を開くことで、「森林問題」「竹製品のよさ」について伝える。	・子どもたちの活動を価値づけると共に次の活動へ見通しをもち、意欲を高めることができるようにする。	★自分の役割を考えて行動しようとしている。
2 6	○作品展を振り返る。 ・残った「竹」について目を向ける。	・竹製品だけでなく、様々な用途に使えることに気付くことができるようにする。	★お客さんの反応をもとに「価値づけ」について振り返り、自分の考えと他者の考えの共通点や相違点に気付くことができる。
2 7 2 8	○残った竹の使い道について考える。	・「竹炭」の多様な用途を調べ、自分が製作したいものについて調べることができるようにする。	★「できるだけ無駄をださない」という視点で考えることができるようにする。
2 9 ～ 3 4	○加工する過程で出された「竹」を竹炭にする。	・自分の役割を意識しながら判断し、安全に「竹炭」を作ることができるようにする。	★これまでの「竹加工」の経験から、他者意識をもって「竹炭製品」の計画を立てることができるようにする。
3 5	○「竹炭石鹸」を卒業記念品として学校へ寄贈する。	・卒業という意識をもち、感謝の気持ちとともに「竹炭石鹸」を寄贈できるようにする。	★自分の活動を振り返り、達成感をもてるようにする。

#### <留意点>

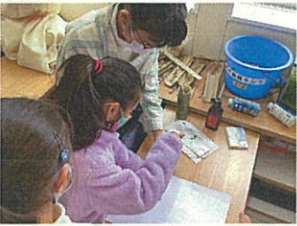



「一人一本の竹」を確保し、とことん「竹」と触れ合い、「竹」のもつ特徴や魅力を感じながら活動に取り組む中で、「森林問題」という課題が「自分事」となるよう意識して計画した。さらに「竹」とのかかわりを深める中で「伝えたい！」という意識の醸成をねらい、その発表の場として「作品展」を据えた。お客さんとのかかわりの中で、「自分の考える価値」と「他者の考える価値」との「ずれ」を実感し、「価値の創造」の難しさについて実感できるよう工夫した。活動の中で、「竹」という材を通し、「他者意識」をもち、達成感を獲得しつつ、自分にできることを追究できるようにした。

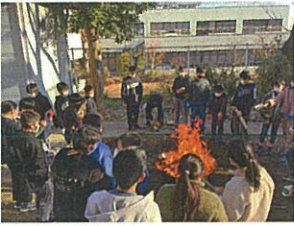


② 事業実施報告書詳細

学校名 横浜市立仏向小学校

時間数	場所	概要	活動記録(写真)	対象者の反応
1 ～ 3	教室	○活動内容の計画。  ・これまでの活動を振り返りながら、中心となる活動を話し合った。 ・「地域の人困っていることを解決することで地域の役に立ちたい」という思いが出された。 ・5年生の社会科の学習から発展し、「森林問題」をテーマとして取り組むこととなった。		・昨年度の総合の楽しい経験を想起し、今年度の活動にも期待している発言が聞かれた。  ・「森林問題」をきっかけとして活動をしていく中で、「地域の人に発信したい」という意欲が見られた。
4 5	教室	○地域の「森林問題」を調べる。  ・通学路に荒れた竹林があることに気付き、持ち主の方に連絡を取った。  ・竹林整備から出された「竹」が廃棄されていることに気付き、その「竹」を再利用する方法を考えていくという活動の方針が決まった。		・社会科で学習した「日本の森林問題」が、身近な地域で起きていることを知り、問題意識が高まった。  ・具体的な活動の見通しがもつことができたことで意欲が高まった。
7 8	教室  校庭	○「竹」の特徴について調べる。  ・「神奈川大井の里観光協会」の竹イベントを実施している方々から「竹」の特徴について教えて		・「竹」は、乾燥させて使うことや切り目を入れると割けてしまうなど、加工する際に必要な「竹」の特徴を理解した。

		いただき、「竹」で製作したいものについてイメージをふくらませた。		
9 ～ 10	教室  校庭	○「竹製品」づくりの計画を立てる。  ・廃棄される「竹」をどのように作り変えることで再び価値が出るのかを検討した。		・「竹」の特徴を知ったことで、必要な道具や加工方法が具体的になり、活動の方向性が決まっていた。
11 ～ 20		○「竹製品」を作る。  ・自分の計画に沿って、「竹製品」を作る。  ・「自分の竹」という意識をもち、授業時間だけでなく、休み時間も使ってとことん「竹」の加工に取り組んだ。  ・弓矢、けん玉のような「おもちゃ」から楽器、皿やはし、ランプといった多様な製品を作りながら、その「製品の価値とは何か？」を考えた。  ・「製品の価値」を考えつつ、「どのように竹のよさを伝えていくか？」も考えた。	   	・実際に「竹」の加工に取り組むことで、教えていただいた「竹」の特徴を実感していた。さらに、加工することの大変さや難しさを感じ、計画を修正しながら取り組む姿が見られた。  ・切断した「竹」の断面図や手触りなどにもこだわる姿から自分で製作した竹製品への愛着が深まっていていることを感じた。  ・自分の製品が完成に近づくと共に、「体験してもらいたい」「見てもらいたい」という他者意識を高めていった。

<p>21 ～ 25</p>	<p>教室  廊下  校庭</p>	<p>○「竹の作品展」を開く。</p> <p>・自分が製作した竹製品の価値をどのように伝えていくかを考えた。</p> <p>・計画に沿って作品展の準備を進めた。</p> <p>・作品展への参加者に対して「竹製品の価値」と「森林問題」について伝えた。</p>	  	<p>・自分が製作した「竹製品」で楽しんでもらったり、感心してもらったりすることで、達成感を得ていた。</p> <p>・体験をしてもらうことを通して、大人と児童の反応の違いや、説明の伝わりずらさなど、改善点を見出し、修正する姿が見られた。</p>
<p>26</p>	<p>教室</p>	<p>○「竹の作品展」を振り返る。</p> <p>・作品展へ参加してくれた人の感想をもとに活動を振り返り、次回の活動の計画を立てる。</p>		<p>・「作品展」の参加者に喜んでもらうことで、達成感を得ることができた。</p>
<p>27 28</p>	<p>教室</p>	<p>○「竹炭作り」の計画を立てる。</p> <p>・「竹製品作り」の際に出された使わない竹も含めて利用価値を考えたことで、「竹作り」という新しい活動へ移行した。</p>		<p>・できるだけ再利用するという意識で調べることで、「竹炭」の可能性に気付くことができた。</p>

<p>29 ～ 34</p>	<p>教室  校庭</p>	<p>○「竹炭作り」をする。 ・「竹」を加工する際に出された切れ端や、余った竹を竹炭にした。  ・作った「竹炭」を使って「竹炭石鹸」を製作した。</p>	 	<p>・竹炭の作り方を調べることを通し、「環境」という視点も含めて考えた姿が見られた。</p> <p>・「竹炭」の利用法を考え、「みんなが日常的に使えるものがある。」という意見から「竹炭石鹸」を作ることに決定した。</p>
<p>35</p>	<p>教室</p>	<p>○「竹炭石鹸」を寄贈する。  ・卒業記念として、「竹炭石鹸」を学校へ寄贈した。</p>		<p>・1年間を通じた活動の集大成として、これまでの取り組みを振り返り、達成感を得ることができた。</p>

### ③ 実施内容について

<p>(1) 実施にあたり工夫した点</p> <p>活動を実施するにあたり意識したことは、「子ども一人ひとりが自分の思いを表現できる活動にする」とこと、「とことん材と触れ合うこと」である。そのために、「一人一本の竹を確保し、授業時間だけでなく子どもが選択した時間で『竹』に触れ合うことができる」よう活動をデザインした。「竹」のとことん向き合い、継続して触れ合うことで「加工の難しさ」や「新しい価値を創り出す難しさ」を感じ、試行錯誤できるよう意識した。</p>
<p>(2) 実施にあたり苦労した点</p> <p>「価値観」をテーマとしたことが難しかったが、有益な活動となった。例えば、「竹皿」を製作した子どもは、自分の製品に愛着をもっているが、その「よさ」が他者と共有できなければ「価値」は生まれないことを学んだ。そのような視点をもって考えることは、子どもたちにとってみれば苦労であったが、学習を深めていく上で大切だと感じた。</p>
<p>(3) 児童の反応</p> <p>「一本の竹から製品を作り出す」という活動に対して、黙々と取り組む姿が見られた。スマートフォンスピーカーを製作した子どもは、試作品を持ち帰り、スマホの幅や角度を計測していた。その計測をもとに、学校ではやすりで磨き、より音が響くよう試行錯誤していた。さらに、イベント開催時は、「音楽を聴く個室がほしい」と思い立ち、教室内を区切ってスペースをつくった。一本の「竹」から、「竹製品作り」をこえた、他者意識を醸成することができた。</p>
<p>(4) 担当教諭及び担当外教諭の変化</p> <p>活動の計画時は、「一人一人がじっくりと活動に取り組む」ことを意識していたが、活動が始まると、「友達同士のかかわり」が生まれたことに気付いた。「竹」の加工を一人でやることは難しく、切断するにも抑えてもらえないと安定しない。そのような必然性が、「助け合い」を生むことに気付いた。また、「繊維に沿って割ける」という特性から、「思い通りの状態にならない」という問題にも直面した子どもたちが多かった。そのような状況でもあきらめることなく、「もう1回やってみよう！」と挑戦する意識が生まれたことも新しい気付きだった。</p>
<p>(5) 今後の課題と取り組み〔児童の思考過程と指導内容との関連付けから、留意すべき事項等〕</p> <p>昨年度は、「一人一人が自分の考えを表現できること」をテーマとした。その成果を受け、本年度は「自分の考えを目的意識をもって他者に伝える」ということに取り組んだ。そのためには、「材との繰り返し継続的なかかわり」と「具体的なイメージをもって試行錯誤できる活動」、そして、「目的意識をもった他者とのかかわり」が必要であることを実感した。活動を進める上で、子どもの追究意欲を高めることが活動を充実させることを感じた。教師側から枠をつくらず、環境設定に終始することで、教師の発想を超えた子どもの学びが実現できることを本実践から感じることもできた。</p>

